

誰もが「わかった」「できた」を実感できるバスケットボールの指導のあり方
～3対2の実践を通して～

1. 設定理由

体育学習では、技能の優劣に関係なく、子ども達が対等に意見を交換し、作戦を立てゲームをすることは難しい。それは、運動技能の高い子どもたちがゲームの中心となり、作戦や意見をすることが多いからだ。だが、それはその子どもが今までの経験の中で「運動ができる」ということで周りに認められているからで、決してその運動の特性を理解しているかというところでもないケースがある。一方で「運動のできない」と感じる子どもは、「運動のできる」子どもに任せてしまい、ゲームでも主体的に動くことも少なくなってしまう。

バスケットボールの楽しさは、仲間と協力してフリースペースを作ったり利用したりして、ボールをシュートへつなげ、得点を争うことにあると考える。運動の得意な子どもはもちろん、得意としない子どもも、ボールに積極的に関わって「苦手」という意識から「楽しい」に変わったり、「自分にもできる」という気持ちをもてたりする姿を目指したい。

バスケットボールを難しくしている要因は、大きく次の3点が考えられる。①攻守が絶えず入れ替わり、自分の役割が変化すること。②作戦の成功する確率は高くなく、どのような作戦が有効かわかりづらいこと。③ポジションが流動的で、得意な子どもだけでゲームをすることが可能であり、必然的に苦手な子どもはゲーム参加に消極的になっていくこと。である。

これらの要因を緩和することで、誰もがどのように動いたらよいか「わかった」と思え、それに基づいた練習により、「できた」と感じられるようにしたいと考え、本主題を設定した。

2. 研究仮説

3対2のゲームの中でルールや作戦の立てさせ方を工夫すれば、シュートにつなげるための動きが明らかになり、「わかった」「できた」を実感することができるだろう。

3. 研究内容

- (1) どの子ども主体的にかかわるゲームの工夫
- (2) ゲームにおける子どもの変容の分析
- (3) 各チームの作戦の変容の分析

4. 結論

○作戦を立てたことで一人一人の役割がはっきりし、誰もが主体的にボールに関わり、パスやシュートをすることができた。

○3対2のゲームにしたことで、オープンスペースの活用の仕方や、オープンスペースを作るための動きがわかり、主体的に動いたり、パスやシュートをしたりすることができた。